

「市場の倫理／競争の倫理——戦間期アメリカからの視点」

佐藤方宣（大東文化大学）

masasato@ic.daito.ac.jp

1. はじめに

本報告では「市場の倫理／競争の倫理」をめぐって戦間期アメリカで展開された論議の意味を、19世紀から20世紀初頭にかけてのアメリカでの論議の展開を振り返るなかで考えてみることにしたい。特に本報告では、この論点について、狭義の経済学・理論とは異なるフィールドで展開された言説をも通覧することで、市場と競争の規範的評価をめぐる論議の同時代的意味と現代的含意について一定の問題提起を行うことを試みる。

経済思想の歴史において、市場メカニズムの理論的分析が中心的課題であったことはあらためて言うまでもない。そしてまた、競争がもたらすことになる社会的・倫理的問題をめぐる規範的分析・評価も、さまざまなかたちで示されてきた。とりわけ、経済社会の集団化・組織化が急速に進展した20世紀初頭のアメリカにおいては、「私益追求が公益実現に」という19世紀的な自由主義のヴィジョンが説得性を失ったとする主張が、アカデミズムの内外で活発に論じられていた。当時展開された言説群は、市場という調整原理の社会的位置づけや競争の規範的含意が問題となる近年の日本においても、単なる歴史的回顧物として以上の意義を有するといえるのではないか。

市場や競争の規範的正当化はいかなる論法でなされてきたのか、結果としての格差はなぜ／どのように正当化されると考えられていたのか、そしてそうした見解に対してどのような批判が展開されるにいったのか。20世紀アメリカのアカデミズムの内外でどのような論議が展開されたのかを通覧し、そこに市場と競争をめぐる現代的な理念とそれを相対化する視点を共に見出そうと試みることで、これが本報告の目指すところとなる。

以上の問題意識のもとに、本報告では、当時の歴史的文脈に十分注意を払いながらも、それぞれの言説を少々大胆に類型化して提示するよう努めたい。

2. 競争と格差の規範的正当化——20世紀への転換期

アメリカの経済思想において市場と競争の規範的評価は当初から一貫して大きな論

点であった。とりわけ 20 世紀への転換期には、のちの世代への影響という点できわめて重要な、市場における競争と分配を正当化する言説が登場した。これらは現代においても市場競争や格差を肯定する際に引き合いに出される論理・理念を体現したものである。その一つは、企業家として一代で財をなし、のちにその莫大な私財の過半を社会貢献運動に転じたカーネギー（Andrew Carnegie 1835-1919）の論説「富の福音」（1889 年）であり、第二には、当時のアメリカを代表する経済学者であり、市場を通じた資源配分メカニズムの分析と共にその倫理的含意を問題にしたジョン・ベイツ・クラーク（John Bates Clark 1847-1938 の『富の分配』（1899 年）である。

競争と格差の正当化——カーネギー「富の福音 The Gospel of Wealth」(1889 年)

貧しい移民の子から一代にして「鉄鋼王」として名を馳せたカーネギーは、1889 年にカーネギー製鋼会社を設立すると共に、『ノース・アメリカン・レビュー』に論説「富」を発表した（後にイギリスで『ペル・メル・ガゼット』に掲載する際「富の福音」と改題）。これは富の集中と寡占・独占を正当化する思想としてしばしば引き合いに出されるものだが、同時にそれは、富は社会から委託されたものであり社会にこそ還元すべきとするものでもある。これはアメリカン・ドリームに付随する「責任」の問題を示すことで、格差社会アメリカの正統性を背景から支える理念を体現するものともいえる。

『富の福音』は、競争を通じた富の集中＝偏在こそが、有能な人間のもとに富を集めさせることで文明を発展させると主張する。それはときに人々にとり厳しいものでもあるが、物質面での大きな発展をもたらすものであり、すべての分野で最適者の生存を確保してくれるがゆえに人類全体からみて最上のものとされる¹。それゆえカーネギーは、不平等の拡大や少数者への集中を、人類の進歩にとって本質的なものとして容認し歓迎しなければならないとする。

では少数者の手に委ねられた富はどのように運用されるのが正しい方法なのか。①家族に残す、②公共の目的のために残す、③その所有者が生前に処分する、の 3 つのうち、カーネギーは（自ら富を生み出さなかった）相続者や政府は愚かな富の使い方をしがちであり、③のみが社会的に有用であるとする。そして多くの人々に少額ずつの慈善を与えるこ

¹ カーネギーは社会進化論者スペンサーの信奉者として知られており、1882 年にイギリス滞在中、スペンサーが訪米すると聞き、故郷のスコットランド訪問を取りやめスペンサーと同じ船に乗船しアメリカへの帰路についたこともあったという。

とよりも、(大きな資金のまま) 無料図書館や学校の建設などに向けるほうが公共的に資することになる。つまり富を蓄積した者は、「同胞の委託人・代理人」として、その資金を社会にとって最有用な用い方をする責務があるとされるのである。

こうして「富の福音」は、結果としての格差を是認すると同時に、競争の勝者に対し(遺贈や政府を介した再分配ではなく)自らの手による社会貢献の義務を課すものとなっている。実際、カーネギーは1901年には金融王J・P・モルガンによるU・S・スティール設立に際し、自らの会社を一括して売却し引退、1911年にはカーネギー国際財団を設立する。ビル・ゲイツによる福祉財団設立やウォーレン・バフェットによる私財の大半の寄付行為に見られるように、これは現在に至るアメリカ的競争社会(の基礎)を理念的に支える／正当化する論理だと言えるだろう。

市場を通じた分配の倫理的正当化——J.B.クラーク『富の分配』(1899年)

ジョン・ベイツ・クラーク(John Bates Clark, 1847-1938年)はアメリカ合衆国が生んだ最初の、優れた国際的な理論経済学者である。限界効用・限界生産力理論の独自な展開によって限界主義理論の体系化に大きな理論的貢献を残し、“アメリカ新古典派経済学の父”と呼ばれることもある。ただし単なる純粋理論家ではなく、現実の経済問題と経済政策に対し常に大きな関心を持っていた。

J. B.クラークの『富の分配』(1899年)は、限界生産力概念に基づき土地・資本・労働という生産要素の配分がなされるメカニズムを説明すると同時に、市場を通じて実現する分配は各生産要素に対する生産への貢献度に応じた分配という意味での倫理的正当性を有すると主張するものであった。これはのちにジョン・ロールズが『正義論』(1971年)で批判の俎上に上げたように²、単なる経済学上の理論的貢献を超え、市場競争を規範的に正当化する論理の範型として大きな影響力を持った。

クラークは、初期の著作である『富の哲学』(1886年)から後期の代表作『富の分配』にいたるまで分配の公正に強い関心を示していた。『富の哲学』ではキリスト教社会主義的な立場に立って分配の問題を論じていたのに対し、『富の分配』では彼が独立に発見したとされる限界生産力理論に基づいた分配理論が提示された。クラークは分配が公正か否かは

² ロールズ『正義論』第5章「分配の正義」第47節「正義の準則」、とりわけ注34などを参照のこと。ちなみに同章内でこの準則を批判していく際、ロールズはナイトの論考「競争の倫理」を何度か参照している。

労働者が自ら生産した生産物を全て受け取っているかどうかによろとした。そして完全市場の想定をもとにしたときの分配は、労働と資本にそれぞれの生産への貢献度に応じた分配を実現するものであり、それゆえに“公正”であるとした。つまり『富の分配』で展開された限界生産力の分配理論は、単なる理論的論証であるだけでなく、自由放任的経済秩序で実現される分配の正当性という倫理的含意がこめられたものだったのである。

これはヘンリー・ジョージ (Henry George, 1839-1989) ら同時代の社会主義的思潮への批判となっている。労働者が自らの生産への貢献を地主や資本家に不当に奪われているとする見解に対し、クラークは、自由市場を通じた分配は土地・資本・そして労働力という各生産要素のそれぞれ労働への貢献分を所有者に公正に分け与えているのだとしたのである。つまりここでは「貢献度＝分配の多寡」という等式こそが、各生産要素(の所有者)の取り分の倫理的正当性を担保するのであり、労働者(労働力の所有者)が正当性を主張する取り分はその労働の生産への貢献度(限界生産力)が決めるのだ、というわけである。

問題としての倫理的正当性

カーネギーや J.B.クラークの双方が市場における競争や格差を論じる際に持ち出すのは、一面で効率性の観点での訴えかけである。しかし他方で、それぞれ異なる規範的・倫理的原理への訴えかけを見とることができるだろう。カーネギーは個人主義的な競争をもたらす大きな経済的富の実現だけでなく、富の集中がより結果としてより望ましい社会的慈善を実現してくれる点に、(いわば帰結主義的観点から)競争と格差の正当性の根拠を見出している。また J.B.クラークは、市場を通じた資源配分の効率性のみならず、それが生産への「貢献度に応じた分配」という応報的な倫理的正当性の根拠を有するものであることが強調されている。こうした競争と市場の“倫理的な”正当化論の存在が、これから見る戦間期の一連の動向を理解するときには押さえるべき点となる。

3. 市場経済を相対化する言説群へ——大戦間期アメリカの動向

大戦間期のアメリカでは、市場における競争と格差を正当化する見解に対し批判的視線が向けられることになる。ここでは以下 3 つの領域を通覧する。

(1) 経済学界の動向

(2) 実業界の動向

(3) ビジネス・エシックス論議の動向

(1) 経済学界の動向

制度経済学の台頭にせよ、不完全競争の理論の展開にせよ、そして大恐慌・ニューディールをめぐる動向にせよ、大戦間期アメリカの経済思想のトピックスにはそれまで経済学が前提としてきた市場を中心とした経済社会が決定的に変化したという認識の広がりを見て取ることができる³。例えば制度経済学が若手経済学者たちに広範に支持され大きな運動となった背景には、独占・寡占の進展や労働組合の組織化、さらには広告・販売術の発展に伴う消費者行動の変化を通じて、“自由で自立した諸個人からなる市場”という描像がもはや説得力を持たなくなったという共通認識がある。また大恐慌・ニューディール期の政策論争は、景気循環とマクロ経済管理をめぐる理論的問題とともに、政府の経済的責任とリーダーシップはどうあるべきかという規範的問題と結びついたものでもあった。言うなれば、19世紀的な「自由主義」のシステムがいかに変わりゆくのか、いかに変わりゆく“べき”なのかが、方法論的・理論的・政策論的に問題とされていたわけである。

こうした経済学の動向の中で、本報告の関心のもとでとりわけ注目すべきものは、制度派の台頭と、その背景をなす自由主義の変容の認識の広がり（ニューリベラリズム）であろう。また制度派と同様の問題意識を持ちながら（最終的に）異なる態度をとることになったフランク・ナイトによる「競争の倫理」をめぐる重要な問題提起も、この流れに棹さすものといえる（cf. 佐藤 2000, 佐藤 2002）。そこに見てとれるのは、経済社会の変化に伴う経済的責任の変化（個人から社会へ）、「市場的価値」と「社会的価値」の乖離という認識である。市場の規範的正当性の主張が相対化され、ひいては19世紀的な「自由主義」が歴史的に相対化されたのである⁴（cf. 佐藤 2007）。

(2) 実業界の動向

1920年代のアメリカでは、アイスクリーム販売組合から重工業までさまざまな産業の

³ たとえば Backhouse [2002]は大戦間期のアメリカ経済学固有の問題として競争に関する理論と現実の乖離への対応を挙げ、その代表的論者をフランク・ナイト、J. M. クラーク、そしてエドワード・チェンバレンの3人としている(Backhouse [2002], pp.202-207)。

⁴ ここでは20世紀への転換点、第一次世界大戦、大恐慌といった出来事をどのように評価したかという点で各論者の立場をマッピングすることも重要な課題となるだろう。

業界団体を中心に「倫理綱領」作成が活発化し、300以上の記録が残されている。またこうした各産業の動きを受け、全米商工会議所は（いわば集大成的なものとして）15カ条からなる「企業行動原則」を制定している。この「原則」の声明書は約30万人の会員を持つ750以上の団体によって承認されたという。

そこには、無駄の排除と効率性の追求、取引における公正さの希求や協力の賞賛、そして配慮の対象として単なるビジネス上の利害関係者だけではなく公衆や社会をも挙げるといった特徴が見いだせる。綱領制定は一方で、南北戦争以降の「カルテル」や「プール制」といった競争制限のための試みの延長であるとのシニカルな見方もされたが、他方で、本来的に私益追求者であるはずのビジネスの当事者たちが“倫理”の名の下に自らの行為規範を自発的に明文化する動きを見せたことは、同時代の人々の肯定的な反応を呼んだ。

（3）ビジネス・エシックス論議の動向

以上のような実業界の動向を背景に、1920年代には多数のビジネス・エシックス論が刊行された。その担い手は、経営者（GE会長のオーエン・ヤングなど）、ビジネス教育関係者（ハーバード・ビジネス・スクールのW. B. ドーナムなど）のほか、経済学者（ジョン・モーリス・クラークなど）や倫理学者（E. L. ヒアマンズなど）たちである。

そこでは企業規模の拡大と「所有と経営の分離」の進行という経済社会の現実の前に、専門職としてのビジネス集団の大きな責任の認識と固有の「専門職倫理」確立の必要が謳われ、ビジネス活動の自由放任とも政府規制とも異なる、社会的なコントロールの必要性が提唱されていったのである（cf. 佐藤2005, 佐藤編2009）。

4. まとめ

【紙幅の関係で省略。当日配布資料をご参照ください】

※ 当日はパソコン・スライドを使用する予定です。合わせて配布資料も準備します。

※ 文献表は当日配布資料に添付します。事前／事後のご請求は、佐藤まで直接お申し付けください（e-mail: masasato@ic.daito.ac.jp）。